



TITLE:

朝鮮地名の考説(四)

AUTHOR(S):

中村, 新太郎

CITATION:

中村, 新太郎. 朝鮮地名の考説(四). 地球 1925, 4(5): 395-404

ISSUE DATE:

1925-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183013>

RIGHT:

朝鮮地名の考説 (四)

中村 新太郎

四 地形に關する地名

地形を表はした朝鮮の言葉は日本のそれよりも寧ろ多い様であり、従つて地名によつて地形を判斷すべき場所が甚だ多い。殊に朝鮮は一般に氣候劇烈であつて、特種の地形をして充分に其の特徴を發揮してゐることは朝鮮の地形圖を一見した者の直に氣付く所である。朝鮮の地形語を究めたならば日本の地名を解釋する上にも參考すべき事柄が多いと考へられるから一層朝鮮地名語の研究は我等に興味あり且つ有益であると信ずる。茲では充分にそれ等日鮮地名語の相關を論ずるに到るまでに研鑽の歩を進めて居ない、唯朝鮮のに關した概説を試むるに止めるが、後來如上の論議をなすの基礎を作ることが出來れば望外の幸である。

島 島には海中の島と河中の島とがある、朝鮮の南方から南西方にかけての海には島嶼が多く、

昔から朝鮮王は一萬の島の王だと云はれたが、其の數三千三百五島あつて内周圍五百米以上のものが千九百三十島ある。最大の島は濟州島で面積約百二十方里、人口二十萬餘に達する。濟州島と鬱陵島には島制が布かれて居る。島には中々人口の稠密したものがある。南海島、江華島等の如きはそれで前者は一方里三千二百四十八人、後者は二千六百八十五人の密度を持つて居る。島の名にはかなりむづかしいのがある。島名の終りの島を音讀してトーと云ふことが多いが又之を訓讀してソムと呼ぶことも少くない。濟州島の屬島牛島をシェーソムと云ふ。河の中の洲である京城の南東の蘆島はトクソムと云ひ内地人は訛つてトクソンと呼ぶ。漢江の中の汝矣島は今では飛行機の不時着陸場である。又時には平地に孤立した小丘に島をつけることもある。

山 音は日本音と同じくサンで訓はメである、時にミにもなる。朝鮮では山と墓とは切つても切れぬ關係がある。墓は一般に山に設ける。墓をモイと讀みメに近い。山と云へば墓の意味にもなるのは墓所を山所サンソと云ひ、墓番を山直サンジキと稱へ（山直里と云ふも地名も）（惠南扶餘郡にある。）墓地に關する訴訟を山訴と呼ぶのを見ても明かである。

山に陵墓を造るには所謂地理說即ち地術に據るのである。地術は新羅の末期に支那から這入つて來たもので、障風向陽の名地に祖先父母を埋葬する時は其の蔭澤子孫に及んで一門の榮華を來たすものとするのである。墓の最も良き位置は次の如き處である。即ち主脈が北から來て來龍（又は首

龍）で左右に岐れる。東を青龍と呼び西を白虎と稱へる、此の青龍と白虎との間に挟まれた南面の地を選ぶのである。墓の位置の南は低下して此處に東に下つてゆく谷があり、此の谷を隔て、南に案山と稱へられる小丘があるのを良しとする。以上は地相として最良のものなのでありとされる。かかる位置は獨り墓ばかりではなく實は都邑もかゝる位置を選ぶので京城の位置も略之に適つて居るのである。地術を行ふもの即ち地師（又は地觀）は山地を跋涉して地術の上で良いと思ふ場所を求めて歩き之を人に推奨するのである。かういふ俗習が古くからある爲め朝鮮在來の地圖、就中金正浩の輿地圖にしても古山子の大東輿地圖にしても山脈は明瞭に且つ細密に描寫されて居て、然かも細かい支脈に至るまでかなりの正確さを持つて居るのである。又朝鮮では一般に山を尊び殊に北部では山祭を行ふ。此の場合には内地の氏神祭に比敵するものゝ様である。

地名として山を用ひたものは甚だ多い。府郡の名としても群山、釜山、馬山、牙山の様に其の數二十五もある。里名としては玉山洞、竹山洞、東山里、三山里、牛山里等殆んど擧ぐるに遑まがない。山岳を表はした場合には山は峰の集合したもの、言ひ換へれば一塊の山地を指すのである。金剛山、狼林山等皆然りであつて、其の一つ一つの頂點は峰と名ける。

次に山名及峯名のいくつかを擧げて見る。世界中何處でもある高い山に白山の名がある様に朝鮮にも白い山とつけたものが幾つかある。朝鮮の最高峰は白頭山（二七四四米）であり咸南の北水白山

考へられる。

國師峯（ククサボンク）と云ふ山が多い、殊に南鮮に多いが之と訓みを同じくし又は僅かの違ひのものには國祀峰、國士峰、國守峰、國主峰、國壽峰、國秀峰、國祠堂山があり又國師峴、國司嶺、國水峴——一般にククスコケー又はコクスコケーと聞える峠が甚だ多い。國師とは王が高僧に賜與する號であるさうであるが、峠などに高僧を尊んで堂を作つた佛教隆盛時代の遺物だと解釋される。然し國師峰だけにしても地誌資料の山岳表から見出したものが十六の多きに達するから或は他の意味があるのかも知れぬ。

國望峰（ククマンクボンク）又は國望山を四つ程見付けた。日本の上代の國求くにまさを想ひ出させる。日本でも展望のきく山の上から四方を望んでよき國をさがしたのであらう。國求くにまさは國を望むことである。

江原の金剛山や平北の妙高山や忠北の俗離山の様に寺のある山の峰名には佛教に因んだ名を取つてあることが多い。例を舉げて見ると毘盧峰（ビルボンク）は妙香山、金剛山、俗離山、五臺山にあつて俗離山のを除けば皆そこでの最高峰である。金剛山には地藏峰、千佛山、勢至峰、文殊峰、世尊峰、彌勒峰等があり妙香山には香爐峰があり、俗離山には觀音峰があり、智異山には般若峰がある。

山の頂の外形を以て名づけたものゝ中で最も普遍なのは甌峯（シルボンク）である。甌峯山、甌山、甌岩山、小甌峯などもある。之は山頂にいくらか平に見える部分があつて鉢を伏せた様な形をした山である。京都の愛宕山の頂を洛内から見た形と同じ形である。鉢山（バルサン）もあるし、之を發峯（バルボンク）などと書きかへたものもある。形から取つて枕峰（ビュゲボンク）と名づけられたのは白頭山の南方にある。鷹峰（メーボンク）や鳶峰（ソリボンク）などもかなりあるが、小鳥を狩りする爲めの鷹を捕へる樹木をたわめた係蹄（わな）が置かれてある山などにこんな名のついたのがある。

達 山は古語で達（タル）と云ふ、達は山であり又高いと云ふ形容詞でもある。高句麗の烏斯含達（フサル）は新羅に兎山郡となり、夫斯達（フサル）は松山縣となつた。今でも木達里、達田里、達山里、朴達里、古達里等があり、郡名としては大田に接して達城郡がある。達山の如きはたい山を重ねたに過ぎない、朴達（バクタル）の朴は樺類の堅い木であるが、峠の名として朴達をかきかへて百殘峴としたのがあり、之が白岳ともなる。前に述べた様に頭流、智異などはタルから起り、又百濟（ペク）のタラも之で、山から轉じて國を意味することになり、國を朝鮮語でナラと云ふのも之から變つたと金澤博士は説かれた、果して然りとせば我が奈良は國を意味し、或は山にかこまれた國を意味するのも知れぬ。無論達をつけた山名は多い、朴達山、雲達山、高達山等がある。

龍 山は龍に象るから山に關係して龍の字を地名に用ふることが甚だ多い。猶ほ龍の字は鳳、虎、

鶴などと共に威勢のいゝ字であるから其の音を宛字に用ゐるともあるのは言ふまでもない、郡名として龍を用ひてゐるのは龍岡(南平)龍川(北平)の二郡に過ぎないが里洞名には甚だ多く其の數數千にも及ばう。試に普通のものを舉げると、龍山、龍院、龍岩、龍潭、龍井等である。山井里も墓のある所の意味であると思ふが龍岡郡海雲面龍井里には高句麗時代の墳墓がある。

岳 時に支那風に山を岳と云ふことがある。即ち雅名として用ひた場合に云ふので例へば京城の三角山を白岳と呼ぶ様なのである、但し郡名としては安岳(海黃)がある。又濟州島だけでは孤立した山を岳(オルム)と云ふ。朝鮮本土の峯に當ることも見られる。

旨 の音にも訓にも今ではないがマルと讀ます地名が少くない。濟州島で旨テとは平地から孤立して居る山だと聞いた。旨のついた地名は南鮮に多い。松旨里、栗旨里、赤旨里、禿旨里等がある。尤も音でよむ時は今の音のチと讀む。マルと呼ぶに至つた理由は未だ究めて居ない。

岡、邱、阜 のついた地名が少しくある。龍岡、大邱、平邱、古阜等が其れであるが共に邱陵を表はしたものである。

嶺(トッソ) は前に概説の條に一寸述べた様に山地の小字に用ゐるが、一體之は山嘴の頂を指す言葉である。低き山脊を山嶺(サントッソ)と云ふ。里名としてはかなり多い、細嶺里、永嶺里、八嶺里等があるが又長登里などの登も嶺を略して書いたもので長い山稜を表はしたものだと思ふ。

嶺、峙、峴、項 は皆峙を表はす。朝鮮には平原少なく山勝ちであるから峙が甚だ多い。高い峙を嶺と云ひ、それよりも低いのを峙又は峴と云ふが南鮮ではかなり高い峙にも峙をつけたのである。最も低いのを項とする。

嶺（ヨング又はリヨング）は峙であつて山を指すのではない、咸北咸南には千五百米以上の峙が多い、咸南銅店嶺の如きは一八五七米に達する。車踰嶺は咸南、咸北、平北などに多い嶺名である。車踰嶺必ずしも車が通れるといふのではなくて車が通れさうな峙であると云ふに過ぎない、然し併合以來道路開鑿の結果自働車でさへ通れて、初めて名詮自稱になつた車踰嶺もある。之は地形から昔判斷して付けた人が先見の明ある者になつたのである。自作嶺（チャヂャクリヨング）と云ふのは自然に低くて峙を作して居るのを表はす。

峙（チ）と書いてあつても之を峴と同じくコケエと讀ますこともある。峴は訓コケエ音ヒョンである。訓の時に古介と書いたものもある。又峴は上に形容した言葉がある場合にコケエと云はずにたヶエとも云ふ。例へば葛峴里は音ではカルヒョンニーであるが訓讀してカルゲーと云ふが如きである。峙の名に植物名を冠したものが少なくない、栗峴（バームコケエ）、蘆峴、蘆嶺、柳木峴、柎峙、などである。泥峴は泥や粘土のある峙であるが京城の泥峴（チンコケエ）は内地人の集まつた本町通りの一部である。沙峴（モレーコケエ）と云ふのには多く花崗岩の霽亂した砂が露はれて居て爲に道

がよい。岨は又京城などでは町の辻の意味にも用ひられてゐる。夜珠岨は小さな飲食店の並んだ鍾路通りとの辻から這入つた小路である。

項は頸である。モク、メク、メギなどゝ讀む。獐項（ノルモク）といふのが多い。之は主に河の劇しく屈曲して居る場合に河に沿うて道が曲がつて行かずに屈曲部の根元の處の低い頸を越して付いてる所である。白頭山の南方の虚項嶺（フハンニョン）は屢不注意に誤まれて虚項嶺などゝ書かれるが頂のない峠があらう筈はない、こゝは實際項がないので南方からこの玄武岩臺に登つてゆく道が通じて居る所が普通の峠の様に鞍部を作らずに左右にある山稜と其の通路との高低の差が著しくないのから起つた名である、平北昌城郡の緩項嶺なども頸即ち峠としての山稜からの低まりが著しくないのからつけられたのであらう。

串、端、末、角 何れも岬を表はす、串（ユツ）は内地の串（クシ）に同じい。紀伊の串本は岬の根の處を意味し、内地には此の他、山口縣佐波郡に串と云ふ所があり、對馬上縣郡には櫛があり、福岡縣八女郡には串毛があり、串崎は福岡、山口、長崎の各縣にある。猶ほクシと云ふ言葉については後條の仇非の所で述べる。

朝鮮の串のうちで一番著しいのは黃海道なまの西端黃海に突き出た長山串（チャングサンコツ）である。之を日本の船夫は訛つてチャンチャンゴシと云ふのは面白い。串には岬角の外に川隈即ち川の屈曲

の義がある。平北泰川には串江があり京畿抱川には捲灘里(コッタニ)がある。蓋し捲は串と同義であらう。

端は東海岸の北部に多い、舞水端は其の著しいものである。末の訓はクツであつて串のコツに近い、東海岸の南部に多い。角は稀にある。

川、江、河、水 大河は江で、朝鮮には鴨綠江、豆滿江、大同江、漢江、錦江、洛東江の六大江がある。川は小川で音テヨンケ訓ネーである。普通語として大きな川を江(カンケ)と云ひ、小川をケウルと云ふ。ネーは又介(ケー)となる。川と書いてあつてもネーと云はずにケーと讀むことがある。川の付いた府郡は仁川、春川を初め三十一の多きに達し、里名には甚だ多くて擧げるに違ない。文川里、道川里、魚川里などは其一例に過ぎない。音と訓とを併せて清平川(テヨンケピヨンケネー)などと呼ぶ。河のついた地名は割合に少ない、郡名としては今では河東がある許りである。

水は水を示すことは勿論であるが又川の義がある。郡名としては長水、麗水、三水、水原がある、水の訓はムルであり、勿とも書く、於勿里、餘勿里、甘勿里等が南鮮にある。水の義としては清水洞等がある。蓋し勿は高句麗時代の水に對する宛字である。

川の古語は買(マイ) (又は米) である。涪水や沮水 (漢代には鴨綠江を指し後魏では大同江を指したといふ) のバイも買であらう、猶は密

(ミル) 推(ミル) 蔑(ミヨル) も水の古き語で買に同じい、慶南密陽の密も水を意味す、朝鮮ではミルがムルになり日本ではミルがミヅに變つた。安藝國安佐郡三入 ミル は水の義であるかも知れぬ。(未完)